

ひょうごの遺跡

昭和61年9月30日発行
兵庫県教育委員会
社会教育・文化財課
兵庫県埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町
2丁目1番5号
☎(078) 531-7011代

〔題字 教育長 井野辰男書〕

砂丘の上に築かれた円形周溝墓群

ふか え きたまち
— 深江北町遺跡 —

昭和61年3月から5月にかけて、県営深江団地建設に先立ち、神戸市東灘区深江北町2丁目にある深江北町遺跡の発掘調査を行ったところ、弥生時代中期から平安時代にかけての遺構を確認することができました。発掘調査は、北地区と南地区の2地区にわけて行いましたが、特に北地区でみつかった弥生時代の終わりから古墳時代の初めにかけての12基の円形周溝墓群は、他にあまり類例がなく注目されるものです。この円形周溝墓群については、つぎの4点の特徴をあげることができます。

(1) 円形周溝墓が11基まとまってみつかったこと

(2) 円形周溝墓内の埋葬施設はそれぞれ1基ずつで、そのなかに土器棺を収めたものがみられること。

(3) 周溝内から多くの供献土器がみつかったこと

(4) 円形周溝墓群が築かれたのは、弥生時代の終わりから古墳時代の初めにかけての時期にあたり、兵庫県内ではこの時期のものは初めてであること。

まず(1)について説明しましょう。弥生時代の墓（埋葬方法）としては木製の棺を収めた木棺墓や、木製の棺の代わりに石製の棺を収めた石棺墓、壺や甕を棺として利用した土器棺墓（壺



調査風景

棺墓・甕棺墓)、穴のなかに直接埋葬した**土壌墓**などがあります。そして、このような埋葬施設のまわりを溝(周溝)で囲んだものを**周溝墓**と呼び、溝を方形にめぐらしたものを**方形周溝墓**、円形にめぐらしたものを**円形周溝墓**といいます。しかし、方形周溝墓と円形周溝墓とではその形態以外にどのような違いがあるのかについては明らかではありません。

実際の周溝墓は、大阪府の瓜生堂遺跡で見つかった方形周溝墓などから、周溝を掘りその掘り上げた土を盛り上げて小さなマウンド状に築きあげていることが分かっています。例えば現在調査中の神戸市西区の玉津田中遺跡でも、このようなマウンドをもつ方形周溝墓が20数基まとまって明らかになりつつあります。しかし、今回みつかった円形周溝墓については、大半が後世の開墾などにより削平されており、土を盛り上げた部分はほとんど残っていませんでした。

今回みつかった円形周溝墓群は、やや不整形な円形ですが、大きさは径が約7~8mのものが一般的で、小さいものでは4~5mのものが1ないし2基あります。周溝の幅は0.7~2m、深さは30~40cmあります。これらの周溝のいくつかは完全に一周するのではなく、一カ所途切

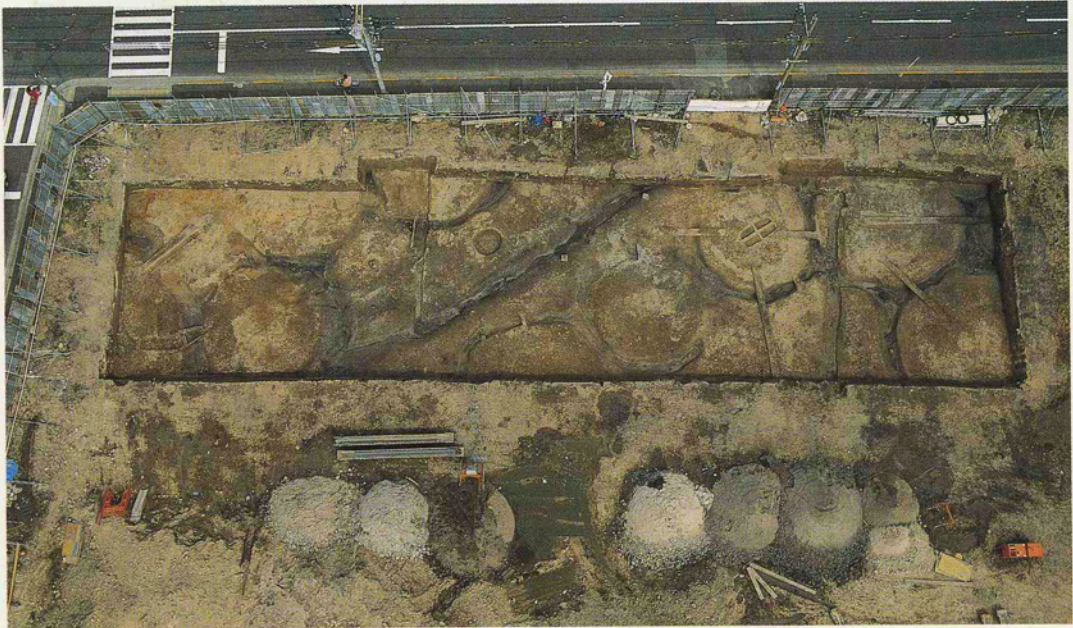
れている所がみられますが、これは陸橋部と呼ばれ、死者を埋葬する際の通り路と考えられています。また、それぞれの円形周溝墓が隣合う周溝墓と同じ周溝を共有していることも一つの特徴といえます。

円形周溝墓は、時期はやや古くなりますが、近くの郡家遺跡(神戸市東灘区)をはじめとして口酒井遺跡(伊丹市)や米里遺跡(八鹿町)などでも見つかっていますが、深江北町遺跡のように11基もまとまってみつかった例は、兵庫県下はもちろんのこと他の近畿諸府県においても初めてのことです。

次に、(2)の埋葬施設についてですが、一般的にみられるものは木棺墓です。しかも、1基単独であるものばかりでなく、複数の木棺墓が一つの周溝墓内にあるものもよくみうけられます。このように、一基の周溝墓内に複数の人が埋葬されていることから、家族ごとに埋葬された所と考えられています。

深江北町遺跡でみつかったものは各周溝墓に一つの埋葬施設しかありません。これは、家族ごとの墓というよりはある特定の人のためのものと考えられます。

今回明らかとなった埋葬施設は、棺を埋める



円形周溝墓群全景



円形周溝墓



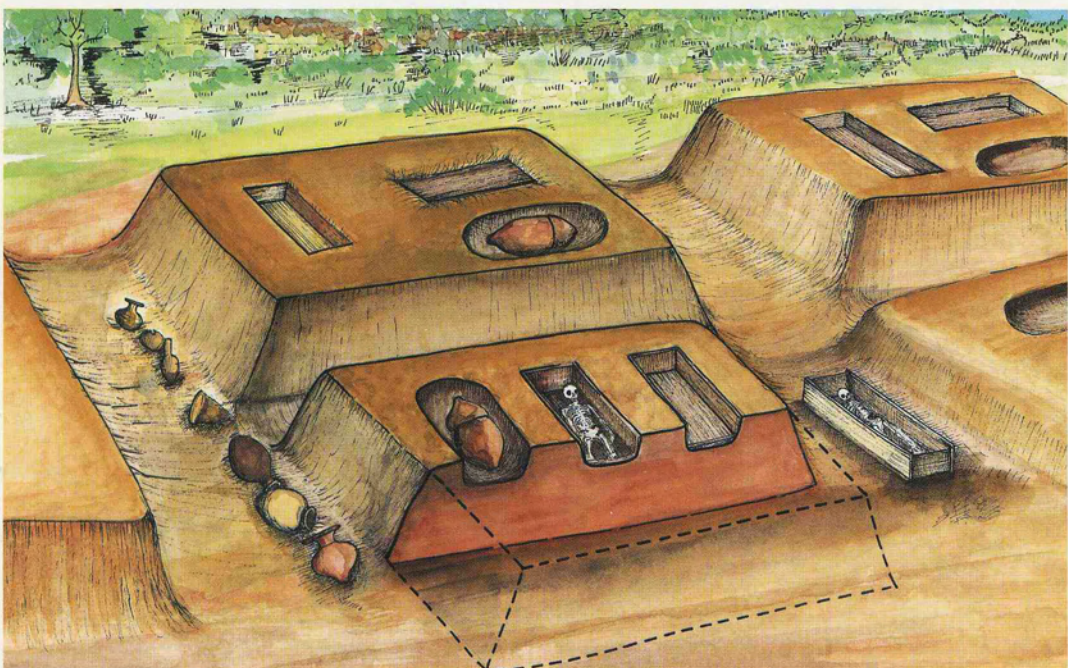
土器棺



周溝断面



供献土器



方形周溝墓埋葬状態の復原

ための穴（墓^{ほこう}）の底の部分だけのものと、土器を取めたものと2種類あります。墓^{ほこう}だけのものについては、長さが3.2m、横幅が1～1.4mの長方形をしています。実際にどのような棺を埋めたのかについてはわかりません。土器棺を取めたものは、1×0.8mの楕^だ円形の穴のなかに壺^{つぼ}を棺とし、同じく壺^{つぼ}の下半部を蓋として利用した壺^{つぼ}棺とよばれるもので、このような壺^{つぼ}棺は一般に乳幼児用の棺として使われたものと考えられています。一般に、周溝墓への埋葬に土器棺を用いるものはよくみられますが、木棺墓などに伴うものが普通で、ここの遺跡のように土器棺のみのものは他に例がありません。また、蓋として利用されている土器はこの遺跡の近くで作られたものと考えられますが、棺として利用されている土器は讃岐地方からもち運ばれたものです。このように遺跡から離れた地域からもち運ばれた土器を棺としているものは、その葬られた人の出身地を示すのではないかという考えもあり、注目されます。



掘立柱建物



竪穴住居跡



水田跡



銅製丸鞆

それでは次に(3)の供献土器についての説明にはいりたいとおもいます。

周溝墓を調査すると周溝内を中心に多くの土器が出土しますが、これらの土器のなかには、底部など土器の一部に穴をあけたものや、口縁などを意識的に打ち欠いたものがよくみられます。これらの土器は日常生活においては使用できないようにしたもので、死者を埋葬するにあたって周溝墓のマウンド上や周溝内などに置かれたものと考えられています。そして、このような土器を供献土器と呼んでいます。深江北町遺跡でもこのような供献土器が供献されたままの状態でも多く出土しました。また、周溝墓に土器を供献する際には、先に述べましたような陸橋部を渡っていったものと思われます。

(4)の、弥生時代末から古墳時代初頭（約1700年前）という時期についてですが、大和や吉備地方などで新しい埋葬の場としての前方後円墳が出現する時期、あるいはその直前といわれている時期にあたります。しかし、この遺

跡の近くでは、この時期の古墳は今のところ明らかではありません。したがって、ここの地域では、他の地域においては古墳が作られ始めている時期になってもなお以前からの伝統的な周溝墓に埋葬し続けていたわけで、一つの地域的特徴といえるかもしれません。

深江北町遺跡は、北地区の円形周溝墓群のほか、南地区、さらに昭和59年度に調査した地区で、弥生時代中期から平安時代にかけての遺跡が明らかとなっています。

まず、弥生時代中期と続く後期の遺構として、南地区で溝を検出しています。そして次の時期が、先ほど紹介した北地区の円形周溝墓群で南地区でもほぼ同時期の壺棺がみつかっています。そして次の時期は少しあきまして、古墳時代後期の土壌と竪穴住居跡が南地区でみつかっています。竪穴住居跡は全体の半分しか調査できませんでしたが、一辺約3.4mの方形のものです。

最後に、奈良から平安時代にかけての遺構ですが、南地区では掘立柱建物2棟分が、昭和59年度に調査した地区で今回の調査地区の北側にあたる地区で水田跡が検出されています。また、今回調査した地区の南側の地区においても

建物の柱穴が見つかっております。このうち、南地区で明らかとなった2棟の掘立柱建物跡は2間×4間の同じ規模で、方向も同じものです。この掘立柱建物の柱穴のいくつかには、当時の柱そのものが残っていましたが、径約20cmのりっぱなものです。また、遺構に直接伴うものではありませんが、銅製の丸柄まるこしらと小型鏡が出土しております。丸柄とは、当時の位をもった人がベルトにつける飾りの一種で、その大きさや材質によって位を表していたようです。このようなことから、深江北町遺跡でみつかった掘立柱建物は、当時の位をもった人がいたところ、特に地方の役所に関連するような性格のものであったと考えられます。

また水田跡は、この遺跡の北端部にあたりませんが、水田面には人や鳥の足跡がはっきりと残っていました。さらに、このような水田は何枚も重複しているのが確認されており、奈良時代以後は水田地帯であったことがわかります。

この他、遺構は確認されていませんが、弥生時代中期の土器も少しみつかっており、少なくともこの時期(約2000年前)には、すでにこの付近一帯で人々が生活していたことがわかります。



方形周溝墓群（玉津田中遺跡）

遺跡散歩

— 深江周辺の遺跡 —

(交通機関) 阪神電車深江駅下車

深江北町遺跡のある東神戸地域には古くからたくさんの遺跡が知られています。これらの遺跡の中には山の上にあるものや海辺にあるものなど、それぞれ立地の上で特徴があって、こうした地理的な環境の下に当地の歴史が営まれてきたといえます。今回の遺跡散歩ではこの東神戸地域の地形と遺跡の形成過程を振り返りながら遺跡を訪ねてみましょう。

今から6000年ほど前には、海は今よりもずっと奥深く入り込んでいました。これは縄文海進と呼ばれていて、当時の気候が温暖であったことによるもので、当時の波打ち際は国道2号線のすぐそばまで迫っていたようです。したがってこの当時の遺跡は国道2号線より山側にしか存在しません。芦屋市の朝日ヶ丘・山芦屋遺跡などがその好例でしょう。

しかし、その後気候の寒冷化に伴って徐々に海岸線は後退を始め縄文時代中期ごろの海岸近くにあった神戸市本庄町遺跡では珍しいドングリ貯蔵穴群がみつかっています。縄文時代の終わりごろまでには海辺に海流や波によって砂堆と呼ばれる小さな砂丘が形成されました。最近になってこれらの砂堆の上に多くの遺跡がねむっていることが、深江北町遺跡や北青木遺跡の発掘で明らかになってきました。

北青木遺跡は阪神青木と深江両駅の中ほどの北側にあって弥生時代では県下でも最も古い前期前半の土器が出土しています。

東神戸の弥生時代の遺跡には全国的にも有名なものが数多くあります。阪急芦屋川駅から北西方向へ山を登ったところにある会下山遺跡は弥生時代の高地性集落として有名です。高地性集落とはかつて戦乱状態にあった際の防御的な村の跡のことで、さすがにここからのなかもめは絶景です。この遺跡では住居跡が復元されていましたが残念なことに失火により焼失してしまいました。

東神戸の山々には数多くの青銅器が、眠っていました。灘区の桜ヶ丘遺跡では昭和39年に



本庄町遺跡ドングリビット

14個の銅鐸^{どうたく}と7本の銅戈^{どうか}が一度に見つかり人々をおどろかせました。現在、これらの青銅器は国宝に指定されていて、神戸市立博物館に展示公開されています。このほかにも東灘区渦が森、生駒、森や芦屋市打出では銅鐸が、保久良神社では銅戈がみつかっています。兵庫県は全国でも最も銅鐸の出土数が多い県で、このうち旧摂津国にあたる阪神地域では26個も発見されていて、青銅器の宝庫ともいえますが、まだまだ多くの青銅器がねむっていることでしょう。

阪神電車石屋川駅を降りて南西へ数分歩くと最近復元整備されたばかりの史跡処女塚古墳につきます。この古墳は整備に先立ち神戸市教育委員会によって実施された発掘調査で県下では珍しい全長65mの前方後方墳であることがわかり、その年代も従来考えられていたよりも古い4世紀代のものであることが明らかになりました。またこの古墳は古く万葉の時代から悲恋物



北青木遺跡木製クワ出土状態

語の主人公として歌われています。この伝説は、2人の男性に慕われた女性が身を処しかねて自殺したため男性も後を追ったので、女性の墓を中に男性の墓を両側に造ってとむらったというものです。もちろんこの女性の墓が処女塚古墳で、男性の墓がそれぞれ西求女塚古墳と東求女古墳です。後の2基は前方後円墳で、伝説にもあるように、両古墳とも前方部を真中の処女塚古墳に向けています。まさか伝説が真実とは思えませんが、ロマンに満ちあふれた話ではありませんか。

さて、この西求女塚古墳は、阪神電車西灘駅南東の国道2号線と43号線合流点近くにあります。現在は公園になっていて墳丘が改変されていますが全長は100mに近く、神戸市内では垂水区の五色塚古墳に次いで2番目の大きさです。

東求女塚古墳は阪神電車住吉駅東の住宅街の真中にあります。古墳は明治36・37年の阪神電車敷設の際に封土を削り取られ後円部の一部だけが公園の中にポツンと取り残されていました。ところが昭和57年に幼稚園改築の際に発掘したところ、前方部の基底と周濠が残っているのがわかりました。この結果東求女塚古墳は全



会下山遺跡復原倉庫

長約80mの前方後円墳であることが確かめられました。古墳からの出土遺物は東京国立博物館に保管されていて、レプリカが神戸市立博物館に展示されています。これらの3基の古墳はお互いに何らかの関係をもったこの地域の首長の墓と思われます。

東神戸にはこのほかにも国鉄住吉駅北側や阪急岡本駅西側にも前方後円墳があったのですが、残念ながら破壊されて消滅してしまいました。

秋の一日、神戸の遺跡を訪ねて歩いてみてはいかがでしょうか。



神戸市東灘区周辺の遺跡

